

学校評価シート（秋田県立大曲支援学校せんぼく校）

評価領域	研究
------	----

重点目標	○ 自分の思いや考えをもとに、「伝え合う力」を育てる授業づくり	P
現 状	・開校からの3年間は、地域資源を活用した授業づくりや教育課程の編成に重点を置いて取り組んできた。地域に出て学んだことへの理解を高め、多くの方とやりとりをする力を育むために、「伝え合う」ことをより意識した授業づくりを充実させる必要がある。	
具体的な目標	・学級づくりや日々の指導において、「聞くこと・話すこと」の日常的な指導の積み重ねと主体的・対話的で深い学びの視点を活用した授業づくりを行い、児童生徒の「伝え合う力」を育てる。	
目標達成のための方策	○テーマや内容、方法を共有するための全校研究会と学部研究会 ○学習指導要領国語科の「聞くこと・話すこと」の領域を根拠とした児童生徒の実態把握と年間指導計画の見直し ○授業改善に向けた学部授業研究会の実施 ○新学習指導要領への理解を高め、授業力を向上させるための研修会や他校研究会等に関する情報提供	
具体的な取組状況	○日々の授業実践 ・学部や学級における「聞く・話す」に関する基本的技能や態度の検討と共通理解 ・様々な学習活動における「伝え合う」場面の設定 ・「研究対象の指導形態の授業提示」（指導主事計画訪問、指導主事または教育専門監要請の授業研究会）と授業改善 ○全校研究会（年4回） ・全校・学部研究の計画検討と研究推進状況の確認 ・学習指導案基本様式の説明と確認（3観点での目標設定） ○学部研究会（年10回） ・学習指導要領国語科「聞くこと・話すこと」の目標及び内容を参考にした児童生徒一人一人の実態把握 ・授業参観や授業研究会の実施 （指導主事または教育専門監を要請した授業研究会を各学部1回） ・各学部での「研究対象の授業」に関する、単元計画検討、指導案検討 ・育てたい力を育むための支援の手立てに関する協議 ○他校研究会や研修会への参加呼び掛けと研究部だよりでの内容紹介 ・実践研究指定校、近隣の特別支援学校を中心とした研究会への参加 ・仙北市の小・中学校の研究会への参加	D
達成状況	○「伝え合う力」に着目した授業づくり ・「伝え合う力」を国語科「聞くこと・話すこと」の領域を根拠とし、「聞く力」「話す力」に着目した実践を各学部・学級で積み重ねてきた。国語科での指導とその他の指導における指導内容やねらいの差別化、関連性を図ることの重要性を再確認した。 ・各学部とも児童生徒の育てたい力における成果は見られたが、伝え合うためには「聞く力」も重要であること、伝え合って思考するためには正しい言葉の理解が大切であることなどを再確認した。「伝え合うこと」への理解をさらに深め、授業力向上を目指す必要がある。	

	<p>○学部授業研究会等を通じた実践の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、2年研究の1年目ということもあり、学部内での研究を中心に行った。児童生徒の実態を共有した上で検討や協議が行われ、全員が意見を出し合った。また、指導主事や教育専門監を要請し、学部内では気付くことのできなかつた視点での助言や具体的な方策を示していただき、授業改善に生かした。 ・「授業のめあて」の提示については、事後の研究会で話題になることが多く、教師側からの提示ではなく、児童生徒が自分たちの知っている言葉で自分たちで決めたものであることが望ましいとの助言をいただいた。授業の振り返りとともに来年度の実践に生かす必要がある。 <p>○他校研究会や研修会への参加と研究部だよりでの紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚支援、天王みどり、きらり支援、大曲支援、横手支援の5校の授業研究会に8名参加 ・角館小、角館中、神代小、中川小の4校の授業参観に3名参加 ・研究部だより 1～5号発行 	
--	--	--

自己評価	<p>(評価)</p> <p>B</p>	<p>(根拠)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の取組を通して、職員の意識の向上が見られ、日々の実践の中にそれらが生かされた。それによって、児童生徒が「自分から伝えよう」「上手に伝えたい」等の意欲や態度が見られてきた。また、繰り返し行うことで伝え方が上達し、自信をもって伝え合おうとする姿も見られるようになった。 ・伝え合うことへの理解をより深めたり、授業のめあての提示と振り返りについて、全校が共通の視点で授業づくりに取り組んだりすることができるよう、「授業づくりのポイント」として具体的に提示していきたい。 	C
------	-----------------------------	--	---

↑ 評価基準 ↓

A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた
 B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
 C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者 評価と意見	<p>(評価)</p> <p>A</p>	<p>(意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員が、実践の振り返りを大切に検討し、児童生徒の実態を共通理解した上で、意見を出し合っている。 ・指導主事等からの助言を、即授業改善に生かしている。 ・「伝え合う力」の育成にあたり、国語科の「聞くこと・話すこと」の領域を活用した共通理解がなされているため、指導内容や場面設定などの課題意識の共有が図られている。 ・職員の意識の向上や児童生徒の意識の変容が見られたことは、研究の成果である。 ・児童生徒が「自分から伝えたい」と意識できるようになったことが大きな成果である。 ・「伝える力の向上」を目標とした取り組みの中で、高等部の「観光ガイドブック」は伝える手段の一つとして評価できる。 	C
----------------	-----------------------------	---	---

自己評価及び 学校関係者評価に基づいた 改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒自身に「人に伝えること」をさらに意識させ、基本的な「聞く・話す」力の育成を目指す授業づくりのために、教員同士で授業を見合い、学校全体で日々の授業改善を進める体制づくり。 ・地域に出る活動など、様々な発信・表現する学習の場を、日々の学習の成果を評価する機会として位置づけた指導計画の作成。 	A
-------------------------------	---	---

学校評価シート（秋田県立大曲支援学校せんぼく校）

評価領域	地域支援
------	------

重点目標	地域の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校、中学校、高等学校において、特別な支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実	P
現 状	地域の園・学校等からの支援の要請を受け対応しているが、実践に繋がる支援の充実を図っていく必要がある。	
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> ・センター的機能についての理解推進を図りつつ、地域の園・学校等の特別支援に関わる実態や情報を収集し、ニーズに合った支援をする。 ・地域の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校、中学校、高等学校や関係機関等とのネットワークづくりを推進する。 	
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> ○センター的機能についての事業説明（年度初めの挨拶回り） ○地域の園・学校等からの相談内容の把握とニーズに応じた支援 ○地域のニーズに基づく研修の場の設定 ○地域支援部報等での情報提供や参考図書の出出 ○本校児童生徒と地域の園・学校等との交流及び共同学習、居住地校交流の推進 ○障害理解のための学習や出前授業等への理解と協力 	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ①センター的機能紹介リーフレットを持参し、仙北市の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校、中学校、高等学校、関係機関を訪問 ②地域の連絡協議会やケース検討会等への参加 専門家・支援チームやセンター的機能(相談会を含む)での教育相談等 ③せんぼく校主催の特別支援教育研修会の実施 ④地域支援部報の発行、地域支援文庫の管理・貸出 ⑤交流及び共同学習、居住地校交流等の実施とそれに向けた連絡調整、障害理解学習等の実施 	D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ①挨拶回り：22カ所（仙北市内全校園等21カ所、市教育委員会） ②・北浦SENネット連絡会議（仙北市）への参加（年8回） （※SEN…special education needs） <ul style="list-style-type: none"> ・専門検査員会議（仙北市）への参加（年5回） ・専門家・支援チームやセンター的機能での相談（6園3校16回うち相談会1園1校2回）、検査の実施（1園8校15回、本校含む）、セミナー・スキルアップ研修（3校6回兼新設校訪問） ③・園等の職員を対象とした特別支援教育研修会（8月）実施 仙北市の多くの園や放課後等デイサービスの職員、せんぼく校職員計38名参加 ④・地域支援部報（5回発行予定）で研修会や具体的な支援策等について紹介 ・地域支援文庫には実践で役立つ図書を選定。蔵書計31冊。 ⑤・仙北市の小・中学校の特別支援学級が集まる「仙北市特別支援教育の会」や、仙北市の保育所、こども園、小学校、中学校、高等学校と共に活動することができた。 <ul style="list-style-type: none"> ・「仙北市特別支援教育の会」と小・中学部の交流（2回）、小学校の特別支援学級と小学部の交流（1校2回）、中学校の特別支援学級と中学部の交流（1校1回）を実施。また、保育所（2園2回）、小学校（2校4回）、中学校（3校6回）、高等学校（1校）とも交流。 	

・居住地校交流：小学部児童 8 名、相手先 4 校、計 15 回実施（うち新規の実施者 2 名）

自己評価	(評価) B	(根拠) <ul style="list-style-type: none"> ・北浦 S E N ネット連絡会議においては、教育、福祉等の関係機関による情報交換に加え、特別支援学級や通常学級の児童生徒のケースについて担任やコーディネーターも交えて支援の在り方等を話し合い、学び合う研修が充実してきている。 ・就学前の子どもたちに関わる園の職員等を対象とした研修会を開催し、「発達の遅れが気になる子どもと保護者支援」（横手市社会福祉協議会くらしの相談窓口相談支援員 鎌田礼子氏）をテーマに、園の訪問時に相談の多い内容に付いて、講話や質疑応答を通して支援に役立つ情報を伝えることができた。仙北市の多くの園や放課後等デイサービスからの参加があり、ニーズの高さが感じられた。 ・情報発信については、理解や支援につながる具体的な情報の提供を充実させていきたい。相談会についても周知を図りたい。 ・居住地校交流は小学部児童全員（在宅訪問児除く）が希望しほぼ 2 回ずつ実施した。十分な打合せの機会や障害理解のための学習の時間をもつことで、相手校の協力が得られ、互いを理解しながらふれあうよい交流となった。 ・中学部では、今年度新たに中学校とボッチャ競技を通しての学校間交流を行うことができ、次につながる発展的な交流活動を展開することができた。 ・中学部と中学校特別支援学級との合同学習では、高等部の現場実習の様子を一緒に見学し、進路学習の一つとして共に学ぶよい機会となった。 	C
------	---------------	---	---

↑ 評価基準 ↓
 A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた
 B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
 C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) <ul style="list-style-type: none"> ・北浦 S E N ネット会議の実施など関係機関との連携や、対外的な研修などが充実している。 ・学校で開設している相談会の参加状況が少ない点は改善が必要である。 ・特別な支援を必要とする児童生徒を見出し、適切な支援が受けられるように進めていくことが肝要である。 ・学校や園だけでなく、地域の様々なイベントに参加したり、地域の方々と交流したりすることが、学校の PR にもなり、特別支援教育に対する理解が広がる機会になっている。 	
------------	---------------	--	--

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・学校間交流や居住地校交流など、継続して行われてきている活動について、職員間の打ち合わせや、障害理解授業の実施などの見直しを図り、双方の児童生徒にとって、よりよい交流の機会となるようにする。 ・地域の関係機関と連携し、幼児児童生徒及び保護者が学校を見学する機会を設定するなど、学校の教育活動を周知し、特別支援教育に関する理解を推進する活動を展開する。 	A
-----------------------	--	---